

2025年度 311ゼミナール第7期

環境防災 活動報告書

G6170 七木田朱理

G6150 田島千咲貴

目次

1. はじめに
2. 視察行程
3. 栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでの聞き取り
4. 栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでの見学内容
5. 荒砥沢地すべり跡地
6. 耕英地区：冷沢（施策工事）
7. 栗駒山イワカガミ平（火山地形）
8. 総括
9. 今後の活動
10. 感想

1. はじめに（目的・背景）

1. はじめに

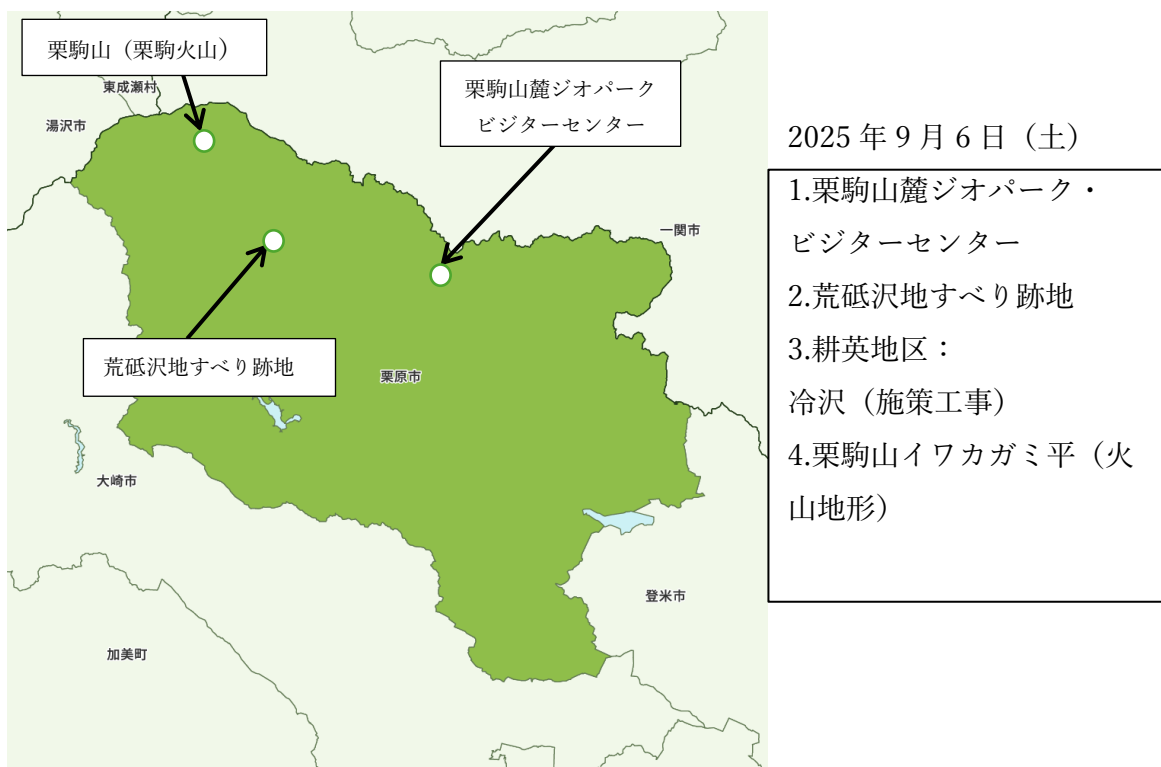
我々、環境防災班は、今年度に新たに設立された班であり、本年度が活動の初年度である。本班は、自然災害や防災に関わる環境的な視点に着目し、被災地の現状や課題を実際に見て、聞いて、学ぶことを目的として活動を開始した。

本年度は、現地視察および関係者への聞き取りを中心に活動を行い、災害によって形成された地形や被害の実態を確認した。宮城県栗駒山麓ジオパークへ訪れ、災害に対する学校の役割や、地域全体で行われている取り組みにも着目し、関係者への聞き取りを行った。

視察は2025年9月6日に行われた。

2. 視察行程

視察行程は以下の通りである。



（出典：Map-It https://map-it.azurewebsites.net/Map/%E5%AE%AE%E5%9F%8E%E7%9C%8C___%E6%A0%97%E5%8E%9F%E5%B8%82/kiwi）

3. 栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでの聞き取り

3-1 聞き取りの目的

栗駒山麓ジオパークを訪問し、関係者からの聞き取りおよび現地視察を通して、同地域における防災教育や災害への取り組みについて調査することを目的とした。具体的には、学校や市民を対象とした防災教育の取り組み、大雨により発生する土砂災害や地すべりへの対策、さらに2008年に発生した岩手・宮城内陸地震の災害経験を次世代へどのように継承しているのかについて把握することを目的とした。

3-2 栗駒山麓ジオパークの概要

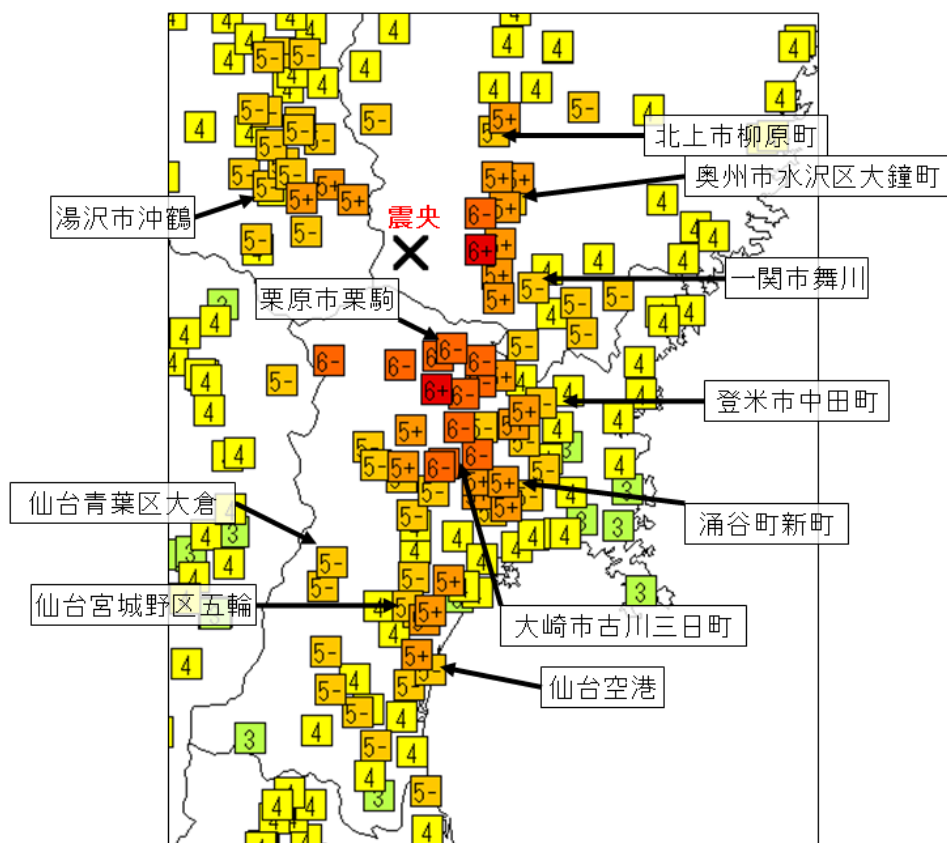


(出典：日本ジオパークネットワーク <https://geopark.jp/geopark/kurikoma/>)

栗駒山麓ジオパークは、宮城県北西部の内陸に位置している。栗駒山麓の地質や地形、人々の営みを紹介するとともに、学びの場や観光の場としても利用されている。ここでは人々が災害を克服し、豊かな地域文化を育んできた。この地域には地震・斜面・火山・洪水などの自然災害の克服の歴史があり、その度に防災力を強化した結果、豊かな地域が作られてきたジオパークである。

3-3 2008年の岩手・宮城内陸地震災害の概要

岩手・宮城内陸地震は、平成20年6月14日（土）8時43分頃、岩手県内陸南部の深さ8kmで発生した。本震の発震機構は西北西―東南東方向に圧力軸を持つ逆断層により、地殻内で発生したものだった。本震のマグニチュードは7.2で、岩手県の奥州市、宮城県の栗原市で最大震度6強を観測した。



(出典：気象庁ホームページ)

https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/kyoshin/jishin/080614_iwate-miyagi/index.html)

3-4 聞き取り内容

【教育関係】

- ① 教育関係に関わることで、どのような取り組みをしていますか。(イベント開催、出前授業等)

地域の方々から過去の出来事や被害に関する情報を集め、それを地域学習につなげる取り組みを行っている。「過去の出来事を伝える」という活動を理科の学習と結び付け、子どもたちに分かりやすく話す機会を設けている。また、地域の施設を活用し、市内向けに情報を公開することで、広く学びの場を提供している。聞き取りの方法としては、実際に被害にあった方から直接話を伺い、その体験談を記録として残している。

イベントについては定期開催ではないが、協力団体が主催するイベントや、地域内外での取り組みへの参加、キャンプイベントなどを通して活動している。小学校とは、総合的な探究の時間を活用し、子どもたちに伝える活動を行っている。また、気軽に誰でも楽しめる夏休みイベントも開催している。

- ② 防災に関する学びを深めるために、地域の施設や団体と連携した教育活動はありますか。

水害が多い地域特性を踏まえ、ダムを設置が行われてきた。また、地すべりなどに関しては町と協議を重ねているが、管轄が異なる点が課題となっている。内部調査を実施し、その結果を展示するほか、案内の際には新しい情報を付け加えて説明を行っている。さらに、安心して暮らせるようにすることを目的として、地すべり内部への立ち入りを行い、理解を深める取り組みも行っている。こうした活動には、地すべりを監視し、モニタリングするなどの東北大学の研究との連携も含まれている。

- ③ 学校との連携において、課題や今後の展開があればお聞かせください。

現在、小学校との連携を中心に取り組んでいるが、今後は中学校・高校との連携も進めていきたいと考えている。特に中・高では教科担任制であるため、連携方法に工夫が必要であり、そこが課題にもなっている。

また、遠方の学校との連携には予算面での課題があり、オンラインや電子教材の活用が求められている。教師がこれらの資料を活用し、学校内で継続的に学びを提供できるようになることが今後の目標である。

- ④ 震災を知らない子どもたちに、危機感を持ってもらう工夫などはありますか。

地震の現象を正しく理解してもらうことを大切にし、その上で対策を考えられるようにしている。地滑りなどの現場が保存されているため、実際に残っているものを

見せることができる。このように、知識をつけてもらうことで、子どもたちに現実感を持ってもらう工夫もしている。また、県外の方にも知ってもらうことが大事だと感じ、県外の方に向けての取り組みも行っている。さらに、大人にも情報を伝えることで子どもたちにも伝わると考えているため、学習会や情報発信も行っている。

震災を知らない子どもたちには、まず、「知ること」を通して心構えを持ってもらい、自分なりに考える機会を設けることで、防災を自分事として捉えられるようにしていきたいと考えている。

【地域関係】

- ① 大雨によって起こる、土砂災害、地すべりに対してどのような対策をしていますか。

大雨によって発生する土砂災害や地すべりに対しては、パネルなどにまとめ、展示を通して視覚的に分かりやすく伝える工夫を行っている。災害の仕組みや具体的な対策について、政府から発信されている情報をそのまま伝えてしまうと、難しい言葉が使われており、理解しにくい。そのため、内容をかみ砕き、子どもたちにも理解できるように説明している。複数の情報を関連付けて伝えることで、災害への理解が深まるよう努めている。イベントについては、講演会を開き、市民の方にお話をする活動を通して、災害と現在の状況に合わせた対策がつながるようにしている。一方で、資料を来館者一人ひとりに配布できる体制までは整っていない点が課題となっている。

- ② 避難情報の発信方法や住民への周知はどのように行われていますか。

避難情報の発信については、都道府県が中心となって取り組みを進めている。災害時に危険となる区域や、建物を建てる際に注意が必要な範囲については情報公開が行われている。また、市の放送による周知や、登録制のメール配信によって、住民に直接情報が届く仕組みが整えられている。これらの情報を分かりやすく提供することを重視している。細めに情報を発信していくことが課題となっている。

- ③ どのように次世代に2008年の災害を伝えていますか。また、地域の子どもたちや住民にどのように伝えていますか。

2008年の災害については、地盤の特徴やハザードマップを活用しながら伝えている。加えて、当時活動したボランティアの体験談を紹介することで、災害の実態を具体的に知ってもらう機会を設けている。シミュレーション装置を用いて災害のメカニズムを理解し、今後どのような場所が危険になり得るのかを考える学習

を通して、教訓を次世代へつなげている。

- ④ 災害の記録や教訓を伝えるために、地域で行っている行事や取り組みはありますか。

地域では、自主防災組織の研修をはじめ、県内外での防災に関する活動が行われている。施設の案内や説明、防災に関する依頼への対応、防災クラブや消防団の活動なども重要な取り組みである。地すべりの見学など、実際の現場を活用した学びも行われており、地域内に限らず幅広い人々を対象としている。

- ⑤ 地域の防災訓練や啓発活動には、どのような団体や企業が関わっていますか。

防災訓練や啓発活動には、市の関係機関との連携をはじめ、学術機関からの協力による資料作成、草刈りなどの環境整備に関わる団体との協力がある。また、学校と連携した教育・観光イベント、防災プログラムや事業の実施など、多様な形での参加が見られる。複数の構成員によるパートナーシップのもと、活動が展開されている。

- ⑥ 災害発生当時の情報共有や物資の提供などについて、他のセクターとはどのような協定や仕組みがありますか。

災害発生当時は、市の取り組みを中心に情報共有が行われ、安全確保に向けた対応が進められた。市から提供された情報をもとに発信を行い、募金活動も実施された。また、災害の原因や経過をまとめた報告資料を作成・配布することで、教訓を広く共有する仕組みが整えられている。さらに、各地域の専門家が集まり、それぞれの知見を生かして分析や助言を行う体制も構築されている。

3-5 考察

【教育関係】

防災や震災に関する教育は、単に知識を伝えるだけではなく、地域の記憶や体験を次世代につないでいく重要な役割を担っていることを感じた。防災教育というと、訓練や避難方法といった指導が中心であるというイメージを持っていたが、地域の方から、直接話を聞き、その体験を記録として残し、理科や総合的な探究の時間と結び付けて学びを深める取り組みが行われていた。特に、地すべりや水害が多いといった地域特性を生かし、実際の現場や展示を活用した学習は、子どもたちにとって現実感をもって災害を捉えることができる有効な方法であると感じた。

一方で、小学校との連携が中心となっており、中学校・高校との連携には教科担任制や予算面などの課題があることも分かった。加えて、近隣に見学できる施設や現場が無い学校では、実際の場に足を運ぶ学習が難しく、防災や震災に関する学びが机上のものにとどまってしまう可能性もあると感じた。そのため、オンライン教材や電子資料を活用し、教師が校内で継続的に活用できる仕組みづくりが今後求められていると感じた。

震災を知らない子どもたちに対しては、恐怖を与えるのではなく、まず正しく知り、自分なりに考える機会を設けることが大切であるという考え方は、教育現場においても非常に重要である。事実に基づいた学びは、災害を自分事として捉え、将来起こり得る災害に対して主体的に行動しようとする意識を育てることが、防災教育の重要な役割であると考ええる。

【地域関係】

地域における防災の取り組みは、行政、学術機関、専門家、地域団体、住民など、多様な主体が連携して行われていることが分かった。土砂災害や地すべりの仕組みや対策を、難しい専門用語を使わず、パネルやシミュレーション装置、講演会を通して分かりやすく伝える工夫は、地域防災の大きな強みであるとも感じる。また、地すべり現場の見学やシミュレーション体験など、実際に災害の現場や状況を体感できる取り組みも、住民の理解を深めるうえで有効である。

一方で、課題は、防災体験や研修に参加できるのは、関心のある人に偏りやすく、地域全体での防災意識の底上げが十分でないことである。そして、資料配布が限られており、来館できない人や、高齢者、子育て世代などには情報が十分に届かない可能性がある。

これらの課題に対しては、いくつかの解決策が考えられる。防災体験や研修が特定の人に偏らないよう、地域イベントや学校との連携を通じて、幅広い世代が参加できる機会を

増やすことが求められる。また、災害情報の発信については。メールや包装だけではなく、SNSやアプリを活用したリアルタイム情報の提供が有効である。

加えて、災害の記録や教訓を次世代に伝える取り組みについても、ボランティア体験談やハザードマップが使われているが、まだ情報をまとめてみんなが見やすい形にはなっていない。そこで、これらの情報をデジタルアーカイブ化し、誰でも簡単にアクセスできる仕組みを作ることが考えられる。また、地域の学校や図書館で教材として使えるようにすると、子どもたちや地域の人たちが災害のことを学びやすくなる。

今回の聞き取りから、地域防災は、一部の人だけで行うものではなく、複数の主体が協力して進めることが重要であることがよく分かった。

【全体を通して】

本調査を通して、防災や震災に関する学びは、学校教育と地域の取り組みが連携することで、より実践的で深いものになると感じた。地域には、過去の災害の記憶や自然環境に基づく知見が蓄積されており、それらを教育に活かすことは、子どもたちが災害を自分事として捉えるうえで重要である。

教育関係の聞き取りからは、災害の実際の現場を活用し、理科や総合的な探究の時間と結び付けた防災教育が行われていることがわかった。一方で、学校間連携の広がりや、遠方の学校への対応、教材の整備といった課題も明らかとなった。

また、地域関係の取り組みからは、行政や研究機関、地域団体など、多様な主体が連携して防災に取り組んでいる現状が見られた。

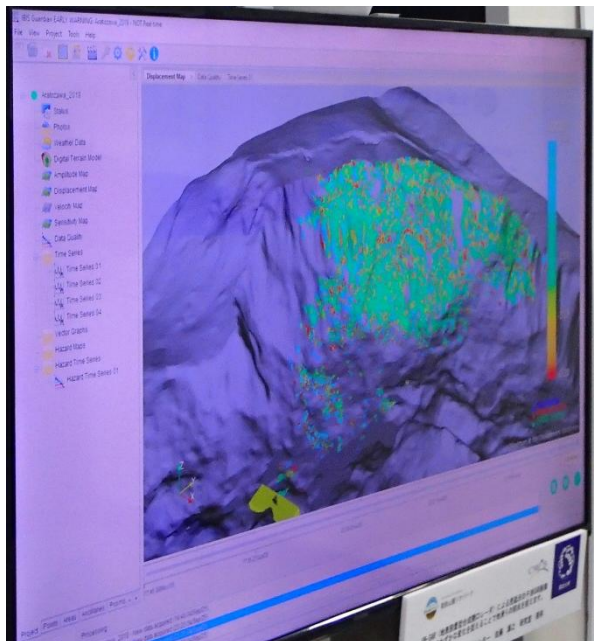


(出典：栗原市 <https://www.kuriharacity.jp/w023/004/010/PAGE000000000000010053.html>)

4. 栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでの見学内容

【GB-SAR（地表設置型合成開口レーダー）】

GB-SAR は、電波を用いて 1km 以上離れた崖面を詳細に測定できるレーダーです。その高さ 100m、幅 900m の崖面から小石一つの落下も検知できるほど。さらにそれを立体画像として確認できるのが、このモニタリング方法の特徴です。これを実現するのか、「独自のレーダー解析技術」。GB-SAR で観測しただけでは波形のグラフでしかないデータを、東北大学の専用コンピューターで自動処理し、高精度の立体地表変位の図面をつくり上げているのです。（栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターより）



① GB-SAR の撮影について

宇宙で使うレーダーを地上で使用し、地面の変化を精密に観測している。GB-SAR は 1 cm ずつ動きながら角度の違う 200 か所から崖面を測定している。このデータをコンピューターで処理し、10m のパラボラアンテナで測定したのと同様に崖面の 1m 四方の大きさの精度で地表面の状況がわかる。さらに、GB-SAR は繰り返しの観測を行っており、一度観測した後、15 分後にもう一度同じ場所を観測し、15 分前のデータと比べて、地表面の 1cm 以下の変化を捉えている。

②GB-SAR の性能について

GB-SAR に使用されているレーダー自体は小さいが、10m のパラボラアンテナと同じ性能を持っている。GB-SAR のレーダーに取り付けたアンテナを 2m 動かして使用することで、アンテナはさらに広い範囲に電波を発射し、精密な観測ができるようになる。装置が小さくなることで場所に左右されずに設置することができ、破損の危険も減少する。GB-SAR を使い長期的に観察しているのは日本でくりこま高原ジオパークのみ。

③GB-SAR をさらに小さくする取り組み

東北大では、GB-SAR をさらに小さくしようと研究中である。ボックスティッシュほ

どの大きさを実現できれば、街中にも GB-SAR を設置することができ、ハザードマップで危険とされている場所を測定することができる。身近な土砂災害の被害を防止することができるようになる。

④ 熊本県での使用

2016 年の熊本地震によって、発生した地すべりにより、国道 57 号線の一部と阿蘇大橋が崩落。東北大学東北アジア研究センター、東北大学災害科学国際研究所、熊本大学、情報通信研究機構では、共同で地すべりモニタリングを行った。GB-SAR による早期警戒情報を国交省、現場で作業を行う熊本組などの関係者に提供していた。GB-SAR で変位が少ないときは安全と判断し、復旧工事を行っていた。

【土砂災害の種類】

・地すべり

斜面の一部、あるいは全部が地下水と地面そのものの重さによりゆっくりと低い方へ動いていく。移動する量が大きいことが多く、甚大な被害を及ぼす。



・崖崩れ

斜面の地表に近い部分が、雨水がしみこんだり、自身でゆるんだりして、突然崩れ落ちる。人家の近くで起きると、逃げる人や死者が多くなる。



・土石流

山腹や川底の石が長雨や集中豪雨などにより、一気に下流へ押し流される現象。山や谷の土、石、木などが一緒に流れてくる。勢いが速いため、一瞬のうちに人家や畑などを飲み込んでしまう。



(出典：特定非営利活動法人 土砂災害防止広報センター
https://www.sabopc.or.jp/sozai/sozai_category/illust_cate/)

【考察】

2008 年に発生した岩手県・宮城内陸地震では、栗駒山周辺において大規模な地すべりが発生した。栗駒の地すべりは、斜面の一部だけでなく広い範囲の地盤がゆっくりと動くという地すべりの特徴が顕著に表れた事例である。地震の強い揺れにより、地下水を含ん

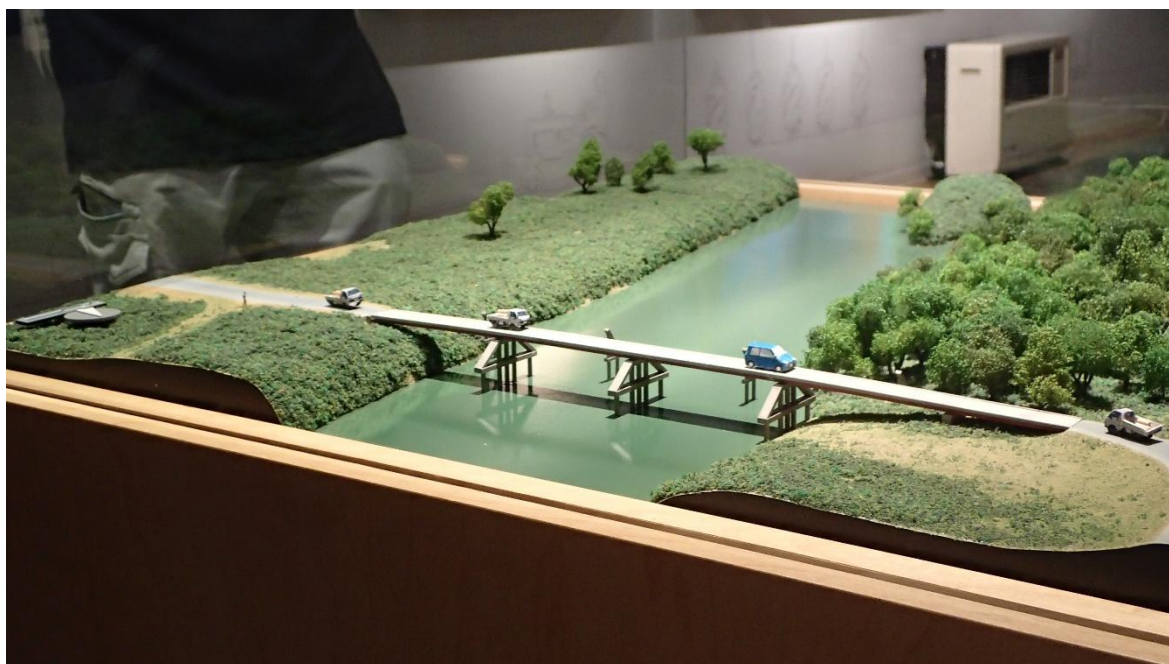
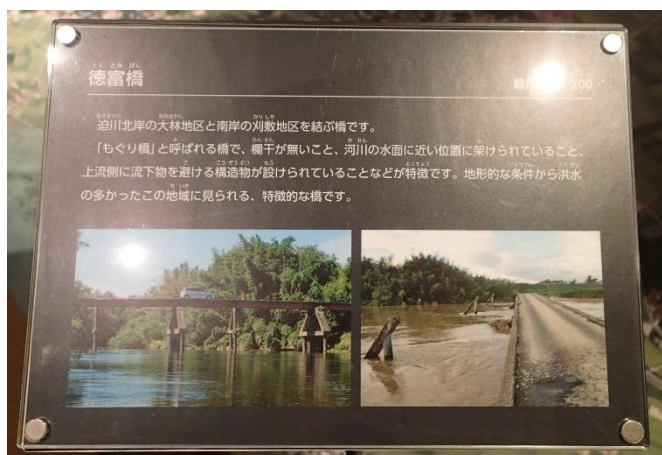
だ斜面の地盤が不安定になり、地面そのものの重さと重なって斜面全体が大きく移動したと考えられる。その結果、道路の寸断や河道の閉塞など、広範囲にわたる被害が生じた。栗駒の地すべりから、地すべりは動きが比較的ゆっくりであっても、移動する土砂の量が非常に大きく、社会生活に深刻な影響を与える災害であることが分かる。地震が発生した際には、目に見える崖崩れだけでなく、斜面全体の変化にも注意し、二次災害を防ぐための早期避難や立ち入り規制の重要性を理解する必要があると考えた。

【徳富橋】

迫川西岸の大林地区と南岸の刈敷地区を結ぶ橋。

「もぐり橋」と呼ばれる橋で、欄干がないこと、河川の水面に近い位置に架けられていること、上流側に下流物を避ける構造物が設けられていることなどが特徴。

地形的な条件から洪水の多かったこの地域にみられる、特徴的な橋。



↑再現された徳富橋

5. 荒砥沢地すべり跡地

荒砥沢地すべりは、幅約 900m、全長約 1,300m、崖の高さ約 150m で、国内の地すべりのなかでも最大規模である。

この地すべりの発生には、地質構造が強く影響していると考えられている。地すべりの地下には、かつてこの付近が湖だった時代のほぼ水平な地層（砂岩・シルト岩）が広がっているため、滑りやすい地層である。この上に、火山の噴出物からできた重い岩石が重なっている。

こうした地質構造を持つ場所が、地震の際に強く揺すられたため、巨大な地すべりが発生した。地すべり上部の滑落崖では排土工事が実施され、重い岩石の一部が取り除かれた。3年後の東北地方太平洋地震の際には、地すべりの大きな変位や崩落は発生しなかった。教育の分野では、右のような図を用いて、子どもにもわかりやすく地層を理解して貰う工夫を行っている。実際に見学を行い、目で見て自然災害について理解を深める活動を行っている。

【考察】

荒砥沢地すべりは、地震だけでなく、滑りやすい地層の上に重い火山噴出物が重なるという地質構造が大きく関係して発生した災害である。このことから、土地の成り立ちを理解することで、その危険性を考えることができる。また、地すべり後に行われた排土工事により、その後の大地震で大きな被害が生じなかった点は、適切な防災・減災対策の重要性を示している。自然の力を完全に防ぐことはできなくても、人の工夫によって被害を軽減できることが分かる。さらに、図や現地見学を通じた学習は、子どもたちが地層や災害を具体的に理解する助けとなる。実際に見て学ぶことで、災害を自分事として捉え、防災意識を高める教育につながると考えられる。



ぎゅぎゅっとくりはら

<https://visit-kurihara.travel/spots/5> (2026-01-17)



6. 耕英地区：冷沢（施策工事）

冷沢崩落地は、平成20年（2008年）岩手・宮城内陸地震が発生したとき、地すべりや土石流など、複合的な土砂災害が、左右の兩岸1kmにわたって生じた場所である。栗駒山の中腹にあたるこの一帯は、火山活動による噴出物が堆積した不安定な斜面に加え、河川の浸食によって谷が形成されている。冷沢で生じた土砂災害は、そこに、地震の強い縦揺れが加わったことで、崩落・流動化して発生した現象である。



写真は、冷沢で生じた土砂災害の様子をそのまま残したものである。冷沢崩落地ではアスファルトに大きな亀裂が入り、道路が大きくゆがんだ状況であることが確認できる。

（左の写真）また、電柱が折れ、倒れている状況も確認することができた。（右の写真）これらは、今も震災の脅威を物語っているといえる。

荒砥沢地すべり跡地同様、こちらの方でも、実際の災害後の様子を観察し、児童生徒に対して、地震災害が地形や人々の生活基盤に与える影響を具体的に理解することのできる活動が行われている。

【考察】

冷沢崩落地の事例は、土砂災害が地震という単一の要因だけでなく、地形・地質条件や河川の働きなど、複数の自然条件が重なり合って発生することを示している。このような複合的要因による災害の特徴を、実際の被災地の様子から読み取るとは防災学習において非常に効果的であると感じる。また、電柱や道路といった生活インフラが被害を受け、その痕跡が残されていることは、過去の出来事として、災害を捉えるのではなく、将来起こり得る災害への備えや防災意識を高めることができる。

7. 栗駒山イワカガミ平（火山地形）



栗駒火山は、東北地方の中央部、岩手・秋田・宮城県境付近にまたがる成層火山であり、約75万年前～50万年前に活動を開始した複数の山体の集合体である。栗駒山周辺では、多数の溶岩流が全体として放射状に広がって分布している。栗駒山周辺の地層は、新第三系の浅海性堆積岩類（泥岩や砂岩）が隆起して土台を形成し、その上に溶岩や火砕流といった火山噴出物が重なっている。このような斜面を河川が深く切り込み、不安定な斜面を創出している。巨大な地すべり地や大規模な崩壊はこのような条件下で発達することとなった。荒砥沢地すべりもこうした条件下で発生したものである。「火山」という言葉は、噴火や災害といったマイナスの側面が注目されやすいが、一方で温泉などの熱資源として地域の暮らしや観光に活用されているというプラスの側面も持っている。火山は人々の生活に影響を与える存在であると同時に、地域資源としての役割も果たしてきた自然現象である。

【考察】

栗駒山周辺の自然環境は、火山活動による恵みと災害リスクの両面を持っており、これらは地域の特性として捉える必要がある。今回の観察を通して、火山と人々の生活は対立するものではなく、自然の特性を理解した上で共存してきた関係であることを学んだ。特に栗駒山周辺では、火山活動によって形成された地形・地質が現在の自然環境や災害リスクに深く関わっており、これらを知ることは地域の成り立ちや人々の暮らしを理解することにつながる。このような学びは、理科教育や地理教育において、身近な自然と人間生活との関係を考える重要な手がかりとなる。

このように、火山を災害の原因としてのみ捉えるのではなく、地域資源としての側面も含めて理解することは、自然を多面的に捉える力を育てることにつながる。子どもたちに地域の自然を伝えていく際には、危険性だけでなく、その恵みや人々の工夫にも目を向けさせることが重要であると感じた。

8. 総括

本活動において、栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでの聞き取りおよび見学は、環境防災を多角的に捉えるうえで非常に重要な学びの機会となった。聞き取り調査を通して、栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターが単なる展示施設ではなく、地域の防災教育や災害の記録継承の拠点として機能していることが分かった。過去の災害について、被災者の体験談や地域の記憶を収集・記録し、それを理科や総合的な探究の時間と結び付けて教育に生かしている点は、防災教育の実践的な在り方を示している。

また、見学を通して、地すべりや土砂災害、火山地形といった自然現象を、模型やパネル、シミュレーション装置を用いて分かりやすく伝える工夫がなされていることを確認した。特に、GB-SARによる地すべりモニタリングの紹介は、最先端の研究成果が地域防災に直接結び付いている事例であり、研究機関と地域が連携することの重要性を強く実感した。災害を「過去の出来事」として終わらせるのではなく、継続的な観測や分析によって、現在進行形の課題として捉えている点が印象的であった。

さらに、聞き取り調査からは、防災教育が単なる避難訓練や知識の伝達にとどまらず、地域の記憶や経験を次世代につないでいく営みであることが分かった。被災者の体験談を語り継ぐ場所や体験談を形に残す場所があることは災害の記憶を風化させることなく次世代へと受け継ぎ、地域全体で防災について考え続けていくための重要な基盤である。現地に残る災害の痕跡を活用した学びは、子どもたちが災害を自分事として捉え、主体的に考える力を育てる上で大きな意義を持っている。一方で、学校間連携や情報発信の方法には課題もあり、より多くの人に学びを届ける工夫が今後求められる。

本年度が初年度である環境防災班にとって、今回の視察は、環境と防災を結び付けて考える視点を具体的に獲得する貴重な機会となった。自然災害の仕組みを理解し、地域の取り組みを学ぶことは、今後の防災教育や地域連携を考える上での基盤となる。今回得られた知見を生かし、災害を過去の出来事として終わらせるのではなく、未来への備えへとつなげていくことが、環境防災班の重要な役割であると考えている。

9. 今後の活動

今年度の活動としては、環境防災班の初年度として、現地視察および関係者への聞き取りを中心に活動を行った。

来年度は、栗駒山麓ジオパークで実際に開催されている学習プログラムやイベントに積極的に参加し、現場での交流を通して防災への理解をさらに深めたいと考えている。また、教育大学の学生という立場を活かし、子どもたちが楽しみながら学べるような防災教材やプログラムの考案にも取り組みたい。

10. 感想

G6150 田島千咲貴

今回の視察を通して、自然災害について学ぶことは、被害の大きさを知るだけでなく、その背景や原因、そして災害後に地域がどのように向き合ってきたのかを理解することが重要であると感じた。栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでは、地すべりや崩落の仕組みを分かりやすく伝える展示が工夫されており、専門的な内容であっても、伝え方次第で子どもにも理解できる学びになると感じた。

また、荒砥沢地すべり跡地や冷沢崩落地を実際に見学したことで、写真や資料だけでは捉えきれない災害の規模や地形の変化を実感することができた。このような現地での体験は、災害を自分事として捉えるきっかけとなり、防災意識を高める上で大きな意味を持つと考えられる。教員の立場で考えると、子どもたちに防災を伝える際には、こうした実体験に基づく学びをもとに、「なぜ起こったのか」「もし自分たちの地域だったらどうなるのか」と考えさせることが大切であると感じた。今回の学びを、将来の授業づくりに生かしていきたい。

G6170 七木田朱理

今回の視察では、2008年の岩手・宮城内陸地震による被害の痕跡が、現在も地域に残され、学びの場として活用されていることが印象に残った。荒砥沢地すべり跡地や冷沢崩落地を実際に見ることで、自然災害が人々の生活や地域社会に大きな影響を与えることを具体的に感じる事ができた。

教員の立場で考えると、こうした災害の学びは、恐怖を強調するのではなく、子どもたちが自分の命を守る行動を考えるきっかけとして扱うことが重要であると感じた。ビジターセンターでの説明や地域の取り組みから、災害の記憶を語り継ぎ、次の世代へとつなげていくことの大切さを学んだ。また、ビジターセンターで行っている防災教育の取り組みや外部の人に向けた活動についても知ることができた。教育現場でのこのような機関と連携しながら子どもが視覚的に学ぶことができる時間を設けることが重要だと感じた。さらに、課題としてオンライン教材や電子資料の活用が挙げられており、それらの資料を活用した振り返りが求められていると知った。

今後は、学校における防災教育の中で、地域の事例を取り入れながら、子どもたちが主体的に考え、行動できる力を育てられる授業を考えたい。